

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0435 ◆◆◆

17/06/07

【 大変動多い 6 月相場、材料豊富で今年も要注意!? 】

5 月相場が終了、マーケットはすでに 6 月相場入りしているが、そんな 6 月相場は経験則に見て「非常に大きな変動を示すことも少なくない」ようだ。確かに、月が明けてまだ数日、しかしドル/円は月初めの 111 円台から 109 円台まで値を下げるなど、早くも 2.5 円程度の変動を記録している。「英総選挙」をはじめ材料が集中する今週 8 日をはじめ、来週の米FOMCなど 6 月は重要なイベントが数多く予定されていることもあり、今後月末にかけて、さらなる大変動が期待できるのかも知れない。

◎円高リスクくすぶるが、パターンからはむしろ「円安」に警戒も!

筆者は経験則の観点から、4 月 26 日付の当レターで「GWと 5 月相場は経験則的に荒れ易い」とレポートしたが、結果からすると確かなかなかの荒れ模様の相場展開をたどっていた。月間変動幅はと言うと 4.14 円で、それほど大きくないものの、月初め 111 円台だったものが 114 円まで上昇したのち、今度は 110 円台前半まで下落するという「行って来い」。往復で 7 円強と、今年 5 月はデータに示されない部分で、荒っぽい変動をたどった 1 カ月だったと言えそう。

さて、そんな 5 月相場を踏まえた足もと 6 月の月間相場見通しを指摘する前に、恒例となっている月間の星取表を見てみると、6 月の勝敗は 1990 年以降昨までの 27 年間で 14 勝 13 敗。ほぼ五分五分と言える内容で、目立った特徴とは言えそうにない。しかし、そんな 6 月相場には興味深いポイントが別途 2 つある。簡単にレポートすると、ひとつは「非常に大きな変動を示すことが少なくない」ーということだ。実際に幾つか例を挙げると、1 ヶ月のあいだに 13 円以上も動いた 1998 年(高値 146.75 円、安値 133.60 円)は別格としても、2013 年 6 月の月間変動幅は 6.98 円で年間を通して 2 位の変動であり、また 2006 年の変動幅 5.39 円は同 1 位、2005 年の変動幅 4.49 円は同 3 位、2002 年は 7.55 円で同 1 位ーなどとなっている。また、もっとも喫緊の事例である昨 2016 年の 6 月も月間変動幅は実に 11.83 円に達しており、これは年間で 2 位の大変動だった。

ただし、その反面でまったく動かない年は、完全な「ベタ風」相場をたどることも多々あるのが 6 月相場の特徴だろう。具体的には 2014 年や 2011 年などがまさにそれで、前者の月間変動幅はわずか 1.56 円、後者も同 1.80 円に留まっていた。いずれにしても、経験則からすると、6 月相場は大きく動くか、まったく動かないか両極端な値動きになりやすいのかも知れない。

一方で、6 月相場におけるもうひとつのポイントは、6 月単体で見た場合、前述したようにほぼ五分五分で明確な方向性がうかがえないなか、近年は「5 月と逆方向に動くことが少なくない」ーことになる。この経験則の面白いところは、たとえば 2000 年以降でみても、2008 年までの 9 年間で 8 回が「同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009 年以降昨 2016 年までの 8 年では 7 回が「逆方向」に動いていることだろう。ちなみに、唯一の例外は 2010 年のことだった。ともかく、一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえることになる。今年の 5 月相場は、前段で指摘したように一時ドル高に振れるも最終的には「行って来い」、ドル安・円高方向で終えただけに、昨年来の「5 月と逆方向に動く」というパターンからすれば、今年の 6 月は逆にドル高・円安で月間の取引を終了する公算が大きいとも考えられる。足もとは、ドル売り・円買いが優勢ではあるものの、月内のどこかで流れが反転する可能性もありそう。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

